

普及だより

平成22年12月21日 No.30
茨城県県南農林事務所経営・普及部門
(土浦地域農業改良普及センター)
土浦合同庁舎第2分庁舎3F
土浦市真鍋5-17-26
電話(直通)029(822)7242
(FAX) 029(822)7370

レンコンにおけるアブラムシの防除

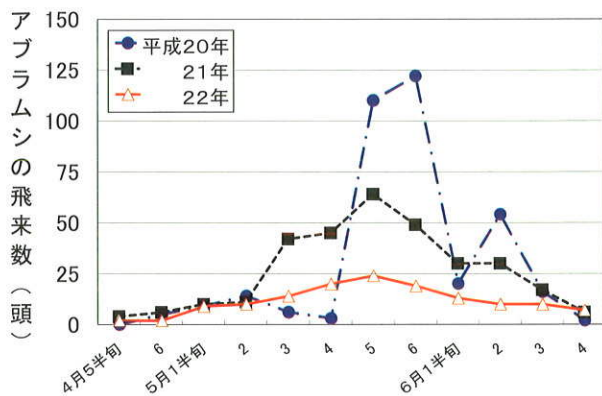
レンコンを加害するアブラムシ(クワイイクビレアブラムシ)は、ウメなどの樹上で卵の状態越冬し、春先に有翅虫(羽の生えた形態)となり、レンコンほ場に飛来します。その後、立葉等に寄生して羽の無い形態となり増殖します。

【アブラムシの発生時期】

アブラムシの適期防除に活用するため、普及センターでは平成20年より有翅虫の発生状況を調査しました。平成20年は五月下旬に飛来のピークを迎えました。また、平成21年は、20年より平均気温が高く推移し、五月中旬から飛来が急増しました。平成22年は低温により飛来は少なかつたものの、ピークは五月下旬でした。これら結果と、土浦気象台の平均気温を考慮すると、例年の飛来数は五月中下旬にピークがあると予測されます。

【防除について】

そのため、アブラムシの防除は五月中下旬頃に行うことが重要です。アブラムシは一度増殖すると防除が困難となり、結果的に防除回数の増加につながります。五月中下旬は、出荷と植付けが重なる多忙な時期になります。五月が、早めの防除を心がけましょう。なお、粒剤の場合、効果の発現には数日を要するので、早めの処理を行います。



▲アブラムシの飛来数の推移

冬も油断しないで!!

冬期に発生するコギクの病害虫

近年、親株や秋植えトンネル栽培のコギクでは、冬期の菌核病やアザミウマの発生により、品質低下や枯死する事例が多くなっています。冬でも気を抜かず、しっかりと観察して、病害虫の発生を確認したら速やかに防除しましょう。

○菌核病(図1)

前年に形成されたネズミの糞のような菌核が土壌中で越冬し伝染源になるので十分注意して下さい。発生を確認したら、発病株は抜き取り、残渣を残さないようにしてから薬剤防除して下さい。

○白さび病(図2)

冬期でも観察をしっかりと行い、一ヶ月に一回程度は定期的な防除をしましょう。特に、親株や育苗時での徹底防除を心がけて下さい。

○アザミウマ類(図2)

耐寒性が強いいため、親株床や雑草の中で越冬し、翌春の発生源となります。また、秋植えトンネル栽培では、トンネル内で発生すると、芯どまりになってしまうこともあります。発生を確認したら速やかに防除して下さい。

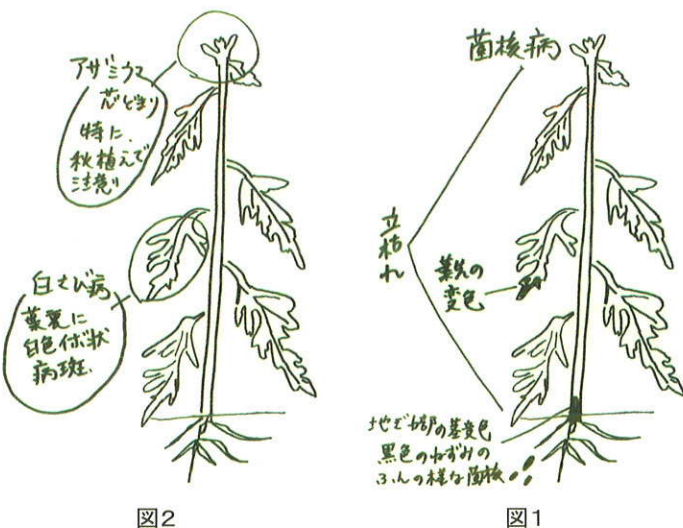


図2

図1

ナシの安定生産に向けて

近年、温暖化の影響でナシ生産が不安定です。着果管理、早期展葉、早期肥大管理により一層の対策を実施しましょう。

○防霜対策

開花前に多目的防災網を展張します。ただし、サイドは開放しておきます。○、五〜一℃程度の昇温効果があります。

草生栽培は、土からの放射熱を抑えて霜害を助長するので、草刈りを励行しましょう。

○着果管理

摘らいや早期摘果により貯蔵養分の浪費を防ぐことが大玉生産につながります。

短果枝の下芽や小さい花芽など、余分な花芽を摘らい時期を待たずにせん除します。

結実させない部位（主枝・亜主

枝・下向きの花芽）の摘らいは早めに行い、貯蔵養分の浪費を防ぐことが大切です。

○人工受粉

花粉は樹勢の強い樹から採取したほうが花粉量が多く、発芽率も高くなります。開花直前の風船状のものを採取します。

輸入花粉は乾燥工程が徹底されているため、吸湿が必要で、説明書に従って吸湿作業を行います。天候不順時には、受粉回数を多くします。また、希釈倍数を低くします。花粉は十分量確保しましょう。

○早期展葉

平成二二年は満開後一〇〇日前後で肥大が鈍りました。早期肥大を図るためには、早期に展葉し、早期に新梢が停止することが重要です。展葉の早い予備枝を多く配置するようにします。

高品質米は種子の準備から

【準備すべき購入種子量は】

必要な購入種子の量は、一箱当たり一六〇gで一〇a当たり一八〜二〇枚を田植えすると、一〇a当たりでは二、九〜三、二kgとなります。種子の量は余裕をもって、早めに準備しましょう。

【採種は産消種子は浸種だけで使用できます】

・浸種は防除効果を高めるために種子1kgに水を四リットルとして、水を入れてから三日間はかき混ぜないようにしましょう。
 ・一回目の水の交換は、四日後に静かに行いましょう。
 ・二回目からは一〜二日置きに水を交換しましょう。
 ・浸種の期間は水温が一〇℃で一〇〜一二日間で、積算温度では一〇〇〜一二〇℃が目安になります

が、九℃以下の日は積算しないで下さい。また、一六℃以上の水温では発芽が不ぞろいになりやすいので気をつけましょう。

【催芽を必ずおこないましょう】

水温を二八〜三〇℃に保ち一五〜二〇時間の加温が目安です。必ず、八割以上がハト胸状態になったことを確認してから播種してください。左の写真を参考に、芽の伸びすぎにも注意しましょう。

☆ダニの話あれこれ☆

ミツユビナミハダニは、平成一三年に大阪及び京都で発見され、新種記載されたナス科に特化した種です。その後、兵庫、東京、福岡、鹿児島、沖縄、高知でも分布が確認されています。

これまでの研究から、本種が寄生できる植物はナス科に限られているものの、他のハダニ類と比べて非常に高い増殖力をもっていることがわかっています。さらに、現在現場で使われている一八種の薬剤の本種に対する効果を検討した結果、いずれの薬剤も高い効果を示しました。このことから、本種が大きな問題となっていないのは、サビダニ等の防除薬剤によって同時防除されているためと考えられています。



▲ミツユビナミハダニ (asahi.com) 平成22年10月21日付より抜粋



浸種し催芽前の籾の状態 → 催芽(28〜30℃、15〜20時間) → ハト胸状態の籾